軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第６８号
2026.10.30

「 幽霊茸 」

大林 義博（ テノール ）

今までに数本生えている姿を見たことはありますが、一ヶ所に 200 本を越す大群落を発見したのはこれが初めて。それも時期的には遅い 9 月でした。

薄暗く、比較的きれいな林の下の地面（例えば樅の木の下など）に生え、全体が透明に近い白色で、退化したウロコ状の葉や、その姿から竜にみたて、『ギンリョウソウ(銀竜草)』（高さ 15cm 内外）の名が付いています。漢名『水晶蘭』（蘭ではない）、また、キノコのようにも見えることから『幽霊茸（ユウレイタケ）』とも呼ばれています。

葉緑素をもたない光合成を止めた植物で、根に住んでいる菌からの養分で成長しています。花は一個で、暗い場所で真っ白な姿をしているので昆虫に容易に見つけられると考えられています。

数日後、改めて写真のデータを整理していて、ふと思い出される映画「八甲田山」。1977 年(昭和 52 年)新田次郎「八甲田山死彷徨（ほうこう）」を原作に制作され、劇中「天は我等を見放した！」の台詞は流行語にもなりました。1902 年(明治 35 年)1 月 23 日～27 日、青森歩兵第五連隊 210 名が厳寒と猛吹雪の中、八甲田山中で方向を失って立ち往生する兵士と、その後 199 名が雪の中に消えたその姿が、この群生する「幽霊茸」に見えたのです。

あれから約 2 ヶ月、今ではウロコ状の葉も黒くなり、花も終わり、種子の入った丸い頭を上に向け、目立たない姿になっています。

一読を・・・・・・『八甲田山 消された真実』伊藤 薫 著　㈱山と渓谷社 刊





◆ 過去の寄稿からキノコにまつわる貴重な生活情報を再掲しました ≪編集部≫

コケの中から指が！ TUTTI 46 号／2024 年 7 月掲載　　大林 義博（ テノール ）

庭のモミジが色付く前の朝（2023.9.27）のこと、新聞を持ちに行った家内が突然大きな声で「コケの中から人の指が出ている…」とかけ込んできました。何事かと外へ出てみると、スギゴケの中から捨てられた赤いゴム手袋のようなものが突き出ていました。

さて、この土地は大日向集落でも西側で、天仁元年（1108 年）追分火砕流で 8～10m 埋もれた岩石と火山灰の原野、国から払い下げを受け畑にしたものの、表土、腐葉土は 10cm 以下で、耕作しても作物はほとんど収穫が見込めない土地、60 年前にカラマツやモミを植林しました。それも、40 年前の台風で、ほとんどが倒れ片付けた跡に植えたトチノキが径 30cm となり花が咲き、実を落とすようになって庭を占領するので止むなく切ったのが約 3 年前、トチノキの根は地面の下は石ばかりなので根を張れず、地面を這うように伸び、太くなるにつれてその根もほとんどがコケの上に出ている、そのような一部腐りかけた根のところから生えている。色も形もまるで人間の指の様で、何とも気味の悪い傘の部分がない不思議な形をした「キノコ」でした。

調べてみると、燃え盛る炎（火炎）のイメージ、「火炎茸（カエンタケ）」（火焔茸）でした。このキノコは触れただけでも皮膚が炎症を起こし、少しでも食べると、発熱、悪寒、下痢、おう吐、手足のしびれ、などの症状の後、消火器不全、運動障害、脳神経障害により死に至ることもあるという、毒キノコの中でも最も危険なキノコとされています。似たようなキノコに「ベニナギナタダケ」がありますが、これと間違えて食べ、腎不全、肝不全を起こし、死亡した例もあります。カシノナガキクイムシという昆虫が木に穿入することなどにより、ミズナラやコナラが枯死、それとともに今まで幻のキノコと言われていたカエンタケが都会の公園などでも発見され注意を呼び掛けている自治体があります。

「絶対に触るな食べるな火炎茸」

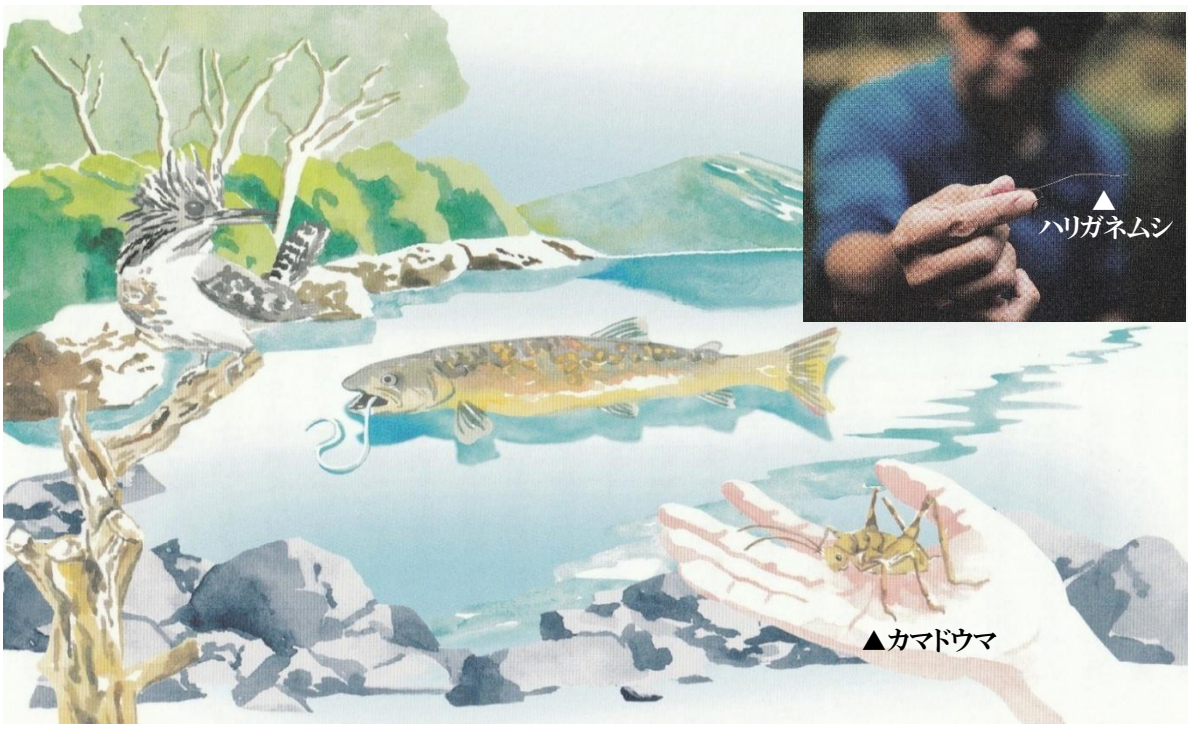




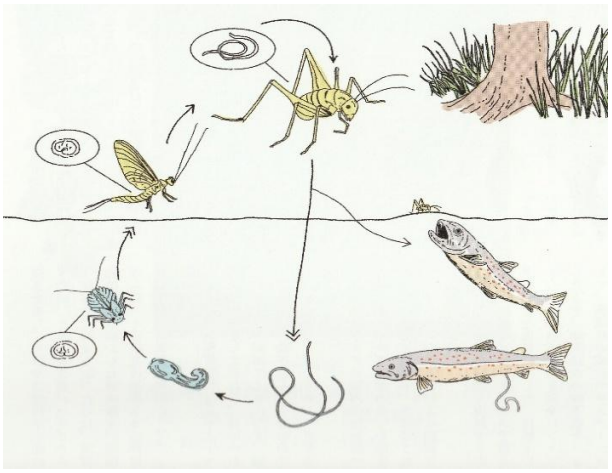
ハリガネムシカマドウマ イワナ

白枝 庸介（バ　ス）

今回は寄生虫と或る昆虫と魚の命を巡るお話し。その寄生虫と昆虫は厳しい環境にあるイワナの生存に欠くことのできない、或る神秘的な現象を引き起こしています。



ハリガネムシという寄生生物がいる。直径２㍉ほどの針金に似た水辺の生き物。卵塊から孵化したその幼生は川底を動いているうちカゲロウ等の水生昆虫の幼虫に飲み込まれると、厚い膜に囲まれた「シスト」という休眠状態となる。その水生昆虫は羽化して水から飛び立ち陸地に向かいカマドウマやカマキリなどの陸生昆虫に捕食される。すると、幼生ハリガネムシはその捕食者の体中で休眠状態から覚醒して成長を開始する。宿主の腹の中で成虫となったハリガネムシは、驚くべきことに宿主の脳を巧みに操り！水辺へ誘導して水に飛び込ませ、じきに体外の水中に脱出しその後に繁殖行動と産卵を行って一生を終える。ある川ではイワナの生存をハリガネムシに誘導され水に飛び込んだカマドウマが支えていた例が報告されている。正にハリガネムシとカマドウマは森と川を繋ぐ大事な存在だとわかった。



さらにカマドウマが欠けると渓流魚が必要とするエネルギーが得られなくなり、代わりに魚の水生昆虫やヨコエビの捕食量が増え、これら分解者の働きによる川底の落葉の破砕速度が遅くなる。「風が吹けば桶屋が儲かる」的にハリガネムシはイワナとの関係性を介し、川の中の生態系に大きな影響を及ぼす存在だったことが、科学的にも解明されている。

『A TROUT IN THE MILK』より抜粋

ハリガネムシの幼生「シスト」は零下３０度にも耐えるそうです。何とも凄まじい生存能力ですが、衆生（しゅじょう）には「生」を追求する自然の叡智があり、生命の連環は自然界の至るところに有ります。そして宇宙スケールで俯瞰すれば、そもそもこの惑星そのものがひとつの複雑系の生命システムなのだと教えられます。

いつぞや尾上菊五郎さんの別荘近くで大きな成獣猪（いのしし）に遭遇しましたが、ゆったり構えていると、彼は一瞬こちらを睨んだ後は何ごとも無かったかのように再びエサ探しを始めました。２０年前に奥飛騨の渓流で出くわしたイノシシが、驚きで凍り付いた僕の横をけたたましい水音を響かせて遁走しましたが、その時と今回のイノシシの反応の違いは〝僕の人間臭さが薄まった〟為なのだと、ひとり合点で喜んだ次第です。

日本画家・小野竹喬（おのちっきょう）曰く『虚心になると自然は近づいて来る』。そして、仏教思想「山川草木国土仏性（さんせんそうもくこくどぶっしょう）」にある〝山や川、草木、獣にも人にも(ハリガネムシにも)等（ひと）しく仏（ほとけ）が宿る〟との世界観。これから我欲が衰え、在るがまゝを受容できるようになれば、もっと自然に近づける！と期待しているところです。

とはいえ、**寄生虫**も**寒さ**も**苦手!!**です。

【編集後記】

みなさま御無沙汰いたしました。大林さんと白枝さんの「自然誌」篇をお届けいたします。

☆シンフォの博物博士の大林さんを突っつくと、いろんな自然界のお話が出てきます。みなさんで、大林さんを突っつき続けましょう!(^^)!

☆白枝原稿のカマドウマの話に戦慄いたしました。我が家でピョンピョンしているカマドウマの体内にハリガネムシのシストが存在しているはずはないと思いますが、しかし、台所シンク内に飛び込んでいたカマドウマもあり（ええ、食器を洗わずに溜めた水につけたままにしておりました）、よもやまさか洗脳されて水を求めていたのだとしたら(@_@ （岡田）